

市制50周年から始まる新たな全盛期！ 東海市流・まちの成長の好循環を生み出す まちづくり・ふるさとづくり

50年の歩み・軌跡を振り返り、 さらなる飛躍を図るイベント

元号が平成から令和へと変わり、空前の10連休となったゴールデンウィークが明けて早々の5月18日、愛知県東海市において、市制施行50周年イヤーの幕開けとなる東海市制50周年記念式典、18日・19日には、「とうかい50年祭オープニングイベント」が華々しく開催された。

東海市が旧知多郡上野町と同・横須賀町の合併により、正式に誕生したのは昭和44年4月。東海市は平成最後の月に満50周年を迎え、令和となった翌5月から「次の50年」に向けての第一歩をする事になったのだ。

それだけになお一層、「東海市制50周年記念式典」、「とうかい50年祭オープニングイベント」が質量ともに充実したものになったことは、例えば次に掲げるプログラム・タイトルを概観しただけでも明らかだ。

プログラム①東海市制50周年記念式典（子どもオーケストラ等子どもたちの出演、企業表彰をはじめ市政功労者の表彰、市内企業との包括連携協定締結披露、来場者全員による合唱など）／同②東海市山車まつり保存協議会・山車9台の勢揃え／同③市民ステージ・子どもおよび市民の文化活動発表／同④姉妹都市（米沢市・釜石市・沖縄市）グルメ・物産出店、カゴメと共同開発の東海市ご当地焼きそば「トマセン焼きそば」初お披露目／同⑤体験ブース（オリジナルカート試乗体験他）／同⑥市制50周年を振り返る映像・写真パネル展／同⑦オリジナルカート完成発表／同⑧姉妹都市紹介（姉妹都市提携の経緯、交流内容展示他）／同⑨特別展示「平洲先生と東海市の歩み」／同⑩東海市ふるさと大使委嘱式（従来の11人に加え、個人4人と3団体に新たに委嘱）／同⑪からくり人形披露／同⑫バラエティ

TO K A I C i t y 1 9 6 9 - 2 0 1 9

すずきあつお
鈴木淳雄
東海市長



「オープニングイベントは各種の記念事業がこれから始まる記念イヤーの皮切りになるわけですが、『東海市50年のエッセンス』が詰まったプログラムといえます」

そう語る鈴木淳雄東海市長は合併前年の昭和43年4月に旧上野町の職員となった。そして市制施行に伴い、翌年に東海市職員へ転じてから平成13年まで33年間勤務。当時企画部長の職にあった鈴木市長は、周囲



とうかい50年祭オープニングイベントの様子(上：市制50周年記念式典、下：山車勢揃え)

またプログラム④の姉妹都市のうち米沢市との提携は、米沢藩中興の祖・上杉鷹山公が、当地出身の儒学者で市民の誇りともされる

「尾張横須賀まつり」「大田まつり」の主役であり、東海市の歴史の厚みを端的に感じさせるイベントだ。

プログラム⑦のオリジナルカートの製作は、「ものづくり愛知」を土台から支える市内12企業の優れた技術力を結集し、世界に一つだけのオリジナルカートを2種類製作する企画で、「車離れが進んでいるとされる次世代の子どもたちに、車の楽しさ、ものづくりの魅力を知ってもらいたい」(鈴木市長)との願いも込められている。



オリジナルカート完成発表

からの勧めで前市長の久野市政を継承するべく市長選に臨むこととなり、以来、現在5期目に至っている。

市制施行前年からの職員時代を含め、鈴木市長の経歴は「まさに東海市の50年とともにあった」といえる。その鈴木市長が《東海市50年のエッセンス》と表現するオープニングイベントのプログラムは、実際、東海市の歴史や次の50年を見据えた取り組みを凝縮した内容で構成されている。

例えばプログラム①での企業表彰や包括連

携協定締結披露は、鉄鋼関連産業をはじめとした企業の持続的な産業活動により、市制施行以来50年間、一貫して普通交付税の不交付団体として歩み続けてこられたことへの感謝の意を表するとともに、今後も引き続き企業と共存・共栄のもと発展していけるよう次世代へつなげていく取り組みの一つだ。

またプログラム②に登場する山車9台は、尾張藩の領地だった江戸時代から当地に続く「尾張横須賀まつり」「大田まつり」の主役であり、東海市の歴史の厚みを端的に感じさせる

細井平洲先生を師としていた関係から平成12年に結ばれた。平成14年度より中学3年生全員が修学旅行で米沢市を訪問し、米沢市民との交流等を行っている。

釜石市との提携は、現在日本一の鉄鋼のまち（鉄Ⅱ金属の出荷額日本一）である東海市の製鉄業の基礎の構築を、昭和39年に釜石製鐵所から東海製鐵所（現・日本製鐵）に転勤してきた745人の製鉄マンが主力として担ったことを縁とし、平成19年に結ばれた。

沖縄市との提携は、沖縄市の前身・旧美里町の職員が旧横須賀町に研修に来て以来、交流が進められてきた経緯から平成21年に結ば



太田川駅西側に設置している細井平洲先生と上杉鷹山公の「対面の像」

れた。また、平成20年度より中学2年生全員が、沖縄市や沖縄市周辺地域を訪問し、海洋学習や平和学習を行っている。

同④の「カゴメと共同開発したご当地焼きそば・トマセン焼きそばのお披露目」は、日本を代表するトマト製品のトップメーカー・カゴメが、東海市を発祥地とする縁で実現した企画だ。

日本一の鉄鋼のまち・東海市は現在、全国有数のフキの生産地としても知られるように、江戸時代から農業が盛んだった。東海市名誉市民であり、同地で農業を営む蟹江一太郎氏がトマト栽培を始めたのは明治32年。同年カゴメを創業し、大正8年にトマトソースを本格生産する工場を旧上野町に建設した。周知の通り、現在では世界的なトマト関連商品のメーカーになっている。

また明治22年には、伊勢湾の豊かな幸を活用したえびせんべいの全国区ブランド・坂角総本舗も創業された。同じく東海市名誉市民である三代目社長の坂誠氏は、銘菓「ゆかり」を命名・発売するなど「坂角のえびせんべい」の名を全国に広めた。さらに東海市は洋ランの生産が盛んだ。洋ラン栽培は昭和29年ごろから始まり、鉄鋼産業と同様に昭和40年代に生産を本格化、現在では多品種で有名な全国有数の産地となっている。

東海市は「鉄などの」硬いモノづくり」と「トマト・洋ランなどの」柔らかなモノづくり」が、見事に同居しているまちなのだ。



東海市産の洋ランが一堂に会する「東海フラワーショー」



東海市名誉市民（左：蟹江一太郎氏、右：坂誠氏）

東海市

市 政 ル ボ

(愛知県)

50年間の歩み

「東海市ではもとも農・漁業が盛んで、鉄鋼関係も戦前に豊田製鋼(現・愛知製鋼)が干拓地へ進出していました。高度経済成長時代の名古屋港の整備(埋立)を開始するとともに、昭和34年には大同製鋼知多工場(現・大同特殊鋼知多工場)が竣工し、昭和39年には東海製鐵(現・日本製鉄名古屋製鉄所)の製鋼工場が稼働するなど、東海市の鉄鋼産業の飛躍が始まりました。

それを可能にしたのは、昭和36年の愛知用



鉄鋼のまち・東海市を象徴する工場風景(日本製鉄)

水の完成です。木曽川水系の長野県・岐阜県の三つのダムを水源とする愛知用水は、名古屋市・東海市をはじめ、愛知県内26の市町が今も利用しています。大きな河川のない知多半島は特に水不足に悩まされることが多く、愛知用水は非常に効果的でした。農業用水だけでなく、鉄鋼生産にも欠かせない大量の水の安定供給が可能になり、金属製品の製造出荷額日本一という今日の状況が生まれたのです。

愛知製鋼や東海製鐵などが立地していた上野町と、大同製鋼などが立地していた横須賀町が昭和44年に合併したのは自然な流れだったといえます」(鈴木市長)

合併当時既に7万8千人の人口があったのも、大手鉄鋼会社や関連会社などが次々と立地しつづけた当時の状況と無縁ではない。その人口が今年4月現在で11万5千人に至るまで、ほとんど減少したことがないのも同様だ。

そしてこの11万5千人という現人口は、平成26年度から実施されている「第6次総合計画」が、実施最終年度(令和5年度)に「到達すべき目標」として設定していた数値だ。目標より5年も早く実現したことになる。

それはやはり「鉄鋼関連産業をはじめ、東海市には雇用の方が豊富にあることが最大の要因」(鈴木市長)だろうし、東海市が今まで取り組んできた妊娠・出産・子育ての切れ目のない支援事業の実施や、小学校2年生から高校3年生までが所属する子どものオーケストラ活動などにより、豊かな心と生きる力を

育む『人づくり、心そだて』事業などが評価された結果なのだろう。

三位一体の大再開発事業の完成に向けて

「いつの間にか私が一番長くなってしまう(笑)。私自身は想像もしていませんでしたが、それでもあえて選挙戦に出たのは、市制施行以来、鉄鋼産業の成長とともに歩む工業都市として、関連企業と手を携えての一貫した姿勢で進めてきたまちづくりが、当時ちょうど、一つの分岐点を迎えていたからです。



太田川駅東側の風景

上野町と横須賀町との合併で誕生した経緯から、中心市街地を持たないまま人口増を続けてきた東海市に、都市としての顔、求心力のある中心市街地を新たに創ろうという大規模計画が、平成の時代を迎える直前ごろから、急速に進展し始めていたのです（鈴木市長）

具体的には現在の名鉄・太田川駅周辺を、魅力的な中心市街地にするための土地区画整理事業に、名鉄・太田川駅の東西を一体的に開発し、活性化を促すための連続立体交差事業、および市街地再開発事業を組み合わせた



太田川駅東西ではさまざまなイベントが年間を通して開催

《三位一体の大再開発事業》だ。

それをけん引していたのが2代目の久野市長であり、前述のように鈴木市長は当時、東海市の企画部長として久野市政を支えていた。

「東海市の市政は、久野市長時代に大きく飛躍しました。その仕上げともいえるべき、太田川駅周辺を中心市街地にする《三位一体の大再開発事業》の準備がようやく出来上がり、これから具体的かつ本格的な事業が始まるうかという時期に、久野市長より市政のかじ取り役のバトンを引き継ぐことになったのです。

ただ当初、私自身にはその任ではないという思いが強かったのです。それに火中の栗を拾うことになる可能性も決して少なくありませんでしたが（笑）、最終的には周囲の方々のお力添えにより、お引き受けすることを決めたのです（鈴木市長）

その決意を最終的に促した要因は何だったのですか、との当方の質問に対し、鈴木市長はにっこりと笑いながら、こう言った。

「それはもちろん、細井平洲先生が、米沢に青年藩主として初めてお国入りする上杉鷹山公に贈ったとされる、『勇なるかな勇なるかな、勇にあらざして何をもって行なわんや』という言葉です」

この言葉には「これから立ち向かわんとする藩政改革に当たって最も必要なのは、勇気です。勇気なくして、どうして政治が施せましょうか」という意味が込められている。

かくして新たなけん引役を得た《三位一体

の大再開発事業》は、紆余曲折を経ながらも着実に進展。連続立体交差事業が平成26年3月に完了した。市街地再開発事業についても、翌平成27年8月に再開発ビル「ユウナル東海」（太田川駅西口）が竣工したことなどで一段落した。

ちなみに「ユウナル東海」の名称（公募）は、細井平洲先生の「勇なるかな」に由来している。1千席以上のキャパシティを持つ大ホールや多目的ホール、細井平洲先生関連の展示施設「嚶鳴広場^{おうめい}」など「東海市芸術劇場」も入っている。「ユウナル東海」と広場を挟んで並ぶ「ラスパ太田川」は大型商業施設。太田川駅東口側に平成23年に完成していた大型商業施設「ソラト太田川」とは対になる形で建設され、「ユウナル東海」を軸に形成される駅周辺のにぎわいの推進力の一つになっている。太田川駅周辺の土地区画整理事業としても、日本福祉大学東海キャンパスの進出を図るなど、若い世代が集う魅力ある中心市街地づくりを進め、平成30年度末の進行率も99%となり、残すところあとわずかとなっている。

特に太田川駅を挟んで展開する東西約1kmの緑の軸は、幅員15mから幅員50mの歩道で構成され壮観だ。太田川駅の東側では、幅員50mの歩道の中にある「どんでん広場」や交通結節点としての機能が充実した駅前広場が整備されている。また、太田川駅の西側はユウナル東海を核として商業施設や教育施設、

雨天時にも屋外イベントが可能な大屋根広場が整備され、東西合わせて「とうかい50年祭 オープニングイベント」をはじめとするさまざまなイベントが年間を通して開催され、にぎわい溢れる市民の憩いの場となっている。

実際に太田川駅を下車し、東口側・西口側の両面に広がる雄大かつ近代的な、緑あふれる街並みを体感し、さらに周辺をくまなく歩いてみれば、太田川駅周辺再開発事業の規模の大きさと成果(効果)がたちどころに実感されることだろう。

硬軟同居のまちの成長の 好循環を生み出すまちづくり

令和8年に愛知県・名古屋市中で開催されるアジア競技大会、令和9年開通予定のリニア中央新幹線(東京―名古屋間)をまちづくりに生かす準備にも余念がない。人口減少の進む地方都市が多い中、県都・名古屋市に隣接し、中部国際空港(セントレア)からも近い交通至便な東海市とその周辺では、さらなる成長を促す要素となりそうな事業計画がいくつも同時進行中だ。太田川駅西口から直結する日本福祉大学東海キャンパスの西側(名古屋港側)の「太田川駅西土地画整理事業」(令和2年に組合設立認可が目標)の実施や、後述するホテル誘致もその一つ。また、名古屋鉄道の既存の8駅を特色ある駅に整備するとともに、新たに新駅を整備するため、本年度より

仮線工事に着手する予定だ。東海市の西側を走る西知多道路や中部国際空港の2本目滑走路の早期整備についても、愛知県や関係市町と一体となり強力に取り組んでいる。

「しかし、これまで増え続けてきた本市の人口も令和8年ごろをピークに緩やかに減少、高齢者が増加していくことが予測されています。そうした近未来を虚心坦懐(たんかく)に想定した上で、公共交通の拡充や、観光振興による交流人口の増加、定住促進を図るための各種事業・施策なども多角的に着実に推進していくかなばなりません。

これまで以上に子育て支援を拡充し、細井平洲先生が最も力を入れた『人づくり・心そだて』事業に力を傾注するなど、子どもたちにも働き盛り世代にも魅力的なまちづくりを推進する必要があります。そうした意味合いも含め、奇しくも《令和元年》と重なることになった市制施行50周年の節目は、次の50年、さらにその先の50年を目指すための《元年》にしなければいけません」(鈴木市長)

実際、観光振興に向けた「東海市ホテル等の誘致に関する条例(平成28年4月1日施行)」によるホテルの誘致やナイトクルーズ実証実験、また光や音の演出により地域資源の魅力やポテンシャルを高めていく「ひかりプロジェクト」を進めている。なお、ホテル誘致は成果を出しつつあり、平成30年9月に1軒が開業し、令和2年度には健康増進施設と併せてもう1軒が開業する予定である。また、

健康づくり、生きがいづくりのため、食や運動に着目した「いきいき元気推進事業」、ふるさとの自然を保全・再生し、次世代に引き継いでいく「ふるさと再生プロジェクト」など、まちの成長の好循環を生み出す取り組みは、既に続々とスタートしている。

人口減少も交付団体も未経験の東海市の観光パンフレットには、《鉄と洋ランのまち》という硬軟とり混ぜたキャッチフレーズが躍っている。堅実と柔軟が同居した土地柄を象徴する、ユーモラスなキャッチコピーだ。

(取材・文＝遠藤隆／取材日平成31年4月19日)



国内最大級の鉄筋コンクリート造り大仏「聚楽園の大仏(大仏寺)」は東海市のシンボル